

I 研究目的と調査実施概要

鈴木そよ子

1. 研究目的

本研究の目的は、教員のキャリア形成における神奈川大学の役割を明確にすることにある。研究目的に迫るために、次のような4点を明確にすることとした。

- ①教員からみた学生時代の学修に対する期待
- ②教員がキャリア形成過程で感じてきた問題
- ③教員が免許状更新講習を含めた研修で、キャリア形成の視点から学びたいこと
- ④教員がリカレント教育として、大学で学びたいこと

本研究の特徴は、「キャリア形成」の対象時期として、学生時代も含むことであり、教員のキャリア形成における大学の役割を考える点にある。これは、共同研究の一員である河上婦志子・神奈川大学名誉教授が1987年に発表した論文「教員の現職教育における大学の役割」(『神奈川大学 心理・教育研究論集』第5号)のテーマを受け継ぎ、今日の研究として展開するものである。

調査の特徴は、研究目的や研究の特徴を反映して、回答者が研修をめぐる現状と大学への要望を表現できる調査となっている点にある。この点は、文部科学省レベル、各教育委員会レベル、さらに大学や様々な団体で実施されてきた教員の意識調査や研修に関する調査の中での特徴といえる。研究成果を神奈川大学における教職課程の教育実践に反映できることも本研究の大きな魅力である。

2. 調査・研究活動の概要

具体的な研究活動は4点からなる。

- ①卒業生の現職教員を対象とした質問紙調査
- ②卒業生の現職教員を対象としたインタビュー調査
- ③学校ボランティアの実践と省察
 - ①②から得られた知見を教員養成のプロセスに生かし、両キャンパスで取り組んだ。
- ④教員免許状更新講習の試行と本実施における取り組み
 - ①②から得られた知見を現職教育の一環である当講習プログラムに生かした。

共同研究の主な活動内容を年度ごとに示す。

2007年度

- (1) 本学卒業生の現職教員への質問紙調査の企画立案・実施・分析
- (2) 学校ボランティア活動に参加した学生の成長過程の分析
- (3) 教育免許状更新講習の構想
- (4) 法規上の詳細な確認、資料収集

2008年度

- (1) インタビュー調査の計画立案、実施、分析
- (2) 学校ボランティアに参加した学生の成長過程の分析
- (3) 教員免許状更新講習の試行を通して、本実施の計画を立案
- (4) 教員採用試験サポート体制づくりのための基礎資料作成

2009年度

- (1) 本研究から明らかになった大学の役割とその遂行のための課題のまとめ
- (2) 卒業生教員と神奈川大学教職課程との実践研究交流ネットワークのあり方の検討
- (3) 学校ボランティア校との連携の充実
- (4) 教員免許状更新講習の評価と課題の確認
- (5) 教員採用試験対策充実のための情報収集

年度ごとに公表された本共同研究の活動報告、研究成果を以下に挙げる。

2007年度

(1) 学会誌等

- ・河上婦志子・他「生徒の学び・学生の学び—中大連携の試み—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第26号, 2007.3, pp.83-98
- ・鈴木そよ子・他「共同研究『教員のキャリア形成に果たす神奈川大学の役割』について」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第27号, 2008.3, pp.111-121

(2) 口頭発表

- ・鈴木そよ子「報告—卒業生に対する質問紙調査の中間報告と教員免許状更新講習—」神奈川大学教育研究交流会 2008.2.16

(3) その他

- ・神奈川大学・教員キャリア形成研究会「教員のキャリア形成についての調査 集計結果報告 (問1～問6のうち数字による回答部分)」2007.12.1 (単純集計による分析。質問紙調査対象者全員に送付)
- ・岩澤啓子『学校ボランティア情報交流会報告書』神奈川大学教職課程, 2007.7
- ・岩澤啓子「学生の成長を確認したときの喜び」『パイオニアスクールよこはま 神奈川大学・横浜市立松本中学校連携事業』横浜市立松本中学校, 2008.1

2008年度

(1) 学会誌等

- ・岩澤啓子・河上婦志子「『生徒支援』の総合演習—中学校の総合的学習と大学教職課程のコラボレーション—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.5-15
 - ・岩澤啓子「教員養成における学校ボランティアの意義」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.107-110
 - ・入江直子「神奈川大学における学校ボランティアの取り組み」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.111-115
 - ・古屋喜美代・入江直子「学校ボランティア学習会を通しての学び—主として小学校ボランティア学習会の分析から—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.117-124
 - ・鈴木そよ子「教員が大学での研修に期待する内容と方法—アンケート「教員のキャリア形成についての調査」より—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.29-40
 - ・鈴木そよ子「神奈川大学の教員養成における新たな目標と計画策定のための—考察—神奈川大学湘南ひらつかキャンパスの実践に即して—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.53-62
 - ・鈴木そよ子・他「教員のキャリア形成に果たす神奈川大学の役割—2008年度(第2年次)研究活動報告—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009.3, pp.81-93
- (2) 口頭発表等
- ・古屋喜美代・入江直子「学校ボランティア体験を通しての学生の学びと成長」日本教育心理学会, 第50回総会, ポスター発表, 2008.10.13
- (3) その他

- ・入江直子「教員免許更新講習に向けて」神奈川大学資格教育課程協議会『神奈川大学資格教育課程通信』第26号, 2009.3.25, p.1
- ・神奈川大学教職課程指導室『学校ボランティア通信』, 「小学校特集」8号, 「特集:戸塚中」9号, 「松本中・栗田谷中・老松中編」10号, 8.9.10号ともに2008.7.16

2009年度

(1) 学会誌等

- ・鈴木そよ子「研究目的と調査実施概要」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.57～66
- ・河上婦志子・鈴木そよ子「質問紙調査結果の概要」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.67～74
- ・河上婦志子「教師の学習ニーズの諸相」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.75～88
- ・古屋喜美代「教師がふり返る, 自らのキャリア形成における壁とは何であったか」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.89～98
- ・大西勝也「学校の現状」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.99～106
- ・関口昌秀「軽度発達障害と思われる子と学校教師」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.107～120
- ・岩澤啓子「現場の教員を支援する—教員免許更新講習(選択:生徒指導)を実施して—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.121～130
- ・入江直子「教員免許更新講習の取り組み—『教師が学びあうコミュニティー』の展望—」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第29号, 2010.3, pp.131～161
- ・共同研究「教員のキャリア形成に果たす神奈川大学の役割」報告書, 2010.3
- (2) 口頭発表等
 - ・河上婦志子・関口昌秀・鈴木そよ子「教員のキャリア形成と大学の役割—神奈川大学卒業生の学習ニーズ調査を踏まえて—」日本教育学会第68回大会発表, 2009.8.29
 - ・鈴木そよ子「教員のキャリア形成に果たす大学の役割—神奈川大学卒業生に対する調査より—」日本教師教育学会第19回大会発表, 2009.10.4
- (3) その他
 - ・教員免許状更新講習におけるラウンドテーブル等の取り組み, 2009.8
 - ・神奈川大学教職課程主催神奈川大学教育研究交流会, 司会・古屋喜美代, テーマ「教師としての悩みと成長～若き教師の成長をどのように支えるか?」2010.1.30
 - ・神奈川大学教職課程「ボランティア通信」No.12～14
 - ・神奈川大学教職課程「平成21年度学校ボランティア情報交流会報告書」2009.11.18
 - ・湘南ひらつかキャンパス教職課程「学校ボランティア活動レポート集」2010.1.18

3. 質問紙調査の概要

本稿に続く報告ならびに論文の基本データとして, 質問紙調査の概要と対象者について述べる。

質問紙調査は, 2007年8月に行った。神奈川大学教職課程を履修した現役の教員754名を対象として, 自宅に質問紙を送付した。754名は現住所を確認できた人数に当たる。

254名から回答があった。回答率は33.7%。回答を受け取った後, 改めて分析対象年齢を限定することになり, 254通のうち, 20代から50代の237名を分析対象者とした。分析対象者数は送付数の32%に当たる。

質問紙(資料I-1「教員のキャリア形成についての調査」質問紙)は, A3用紙両面を用

教員のキャリア形成についての調査

神奈川大学・教員キャリア形成研究会

問1 回答して下さるあなたご自身について伺います。

1. 年齢・性別 _____ 歳 男性・女性 (○で囲む)
2. 卒業年 西暦 _____ 年 _____ 月卒業
3. 学部 1. 外国語学部 2. 法学部 3. 工学部
(○で囲む) 4. 経済学部 5. 経営学部 6. 理学部
4. 学科 _____
5. 免許取得教科 _____
6. 教職に就いてからの年数 _____ 年
7. 教職以外の職業経験 (なし・あり) _____ 年 職種 _____
8. 現在の雇用形態 1. 正規職員 2. 臨時任用 3. 非常勤講師
(○で囲む) 4. その他 (_____)
9. 現在の勤務校 1. 公立学校 2. 私立学校 3. 国立学校
(○で囲む) 4. その他 (_____)
10. 現在の勤務校種 1. 小学校 2. 中学校 3. 高等学校 4. 中等教育学校
(○で囲む) 5. 特別支援学校 6. その他 (_____)
11. 現在の担当教科 _____ / _____ / _____
12. 現在の校務分掌 _____ / _____ / _____
13. 現勤務校での役職 1. 校長 2. 教頭 3. 副校長 4. 主幹 5. 統括教諭
(○で囲む) 6. 主任 7. 主事 8. その他 (_____)

8月15日までにご投函下さい。

問2 次の点について、今の教員の力は何の程度不足していると思いますか。

	大いに		やや	
	不足している	不足している	不足している	十分ある
1 教科に関する専門知識	1	2	3	4
2 教材研究力	1	2	3	4
3 一般的教養	1	2	3	4
4 社会人としての常識	1	2	3	4
5 教員同士の人間関係づくり	1	2	3	4
6 保護者とのコミュニケーション力	1	2	3	4
7 生徒理解	1	2	3	4
8 教育者としての使命感	1	2	3	4
9 学級経営力	1	2	3	4
10 部活指導	1	2	3	4
11 事務処理能力	1	2	3	4

問3 教職についてから行なってきた研修・研究や学習は、自分の能力形成にどの程度役立ちましたか。

	大いに		少し		参加 していない
	役立った	役立った	役立った	役立っていない	
1 初任者研修	1	2	3	4	5
2 経年研修	1	2	3	4	5
3 教委による課題別研修	1	2	3	4	5
4 教科別研修・研究	1	2	3	4	5
5 校内研修	1	2	3	4	5
6 組合研修	1	2	3	4	5
7 民間研究会への参加	1	2	3	4	5
8 同僚との自主学習	1	2	3	4	5
9 先輩から学んだこと	1	2	3	4	5
10 個人的自主学習	1	2	3	4	5

問4 次のような研修があれば、どの程度受けたいと思いますか。

	ぜひ 受けたい	時間がとれれば 受けたい	あまり 受けたくない	受けたくない
1 教科の専門内容	1	2	3	4
2 教科の指導技術	1	2	3	4
3 I T活用法	1	2	3	4
4 カウンセリング	1	2	3	4
5 軽度発達障害 (LD, ADHD, アスペルガーなど)	1	2	3	4
6 生徒指導	1	2	3	4
7 保護者との関係づくり	1	2	3	4
8 学級経営	1	2	3	4
9 学校の管理運営	1	2	3	4
10 その他 ()				

問5 次のような方法の研修があれば、どの程度参加したいと思いますか。

	ぜひ 参加したい	参加したい	あまり 参加したくない	参加したくない
1 実践事例の検討	1	2	3	4
2 ワークショップ (ロールプレイなど)	1	2	3	4
3 専門家の講演	1	2	3	4
4 デイベート	1	2	3	4
5 I Tを使った研修	1	2	3	4
6 その他 ()				

問6 研修や研究会へ出席しにくい理由として、次のものはどの程度当てはまりますか。

	大いに 当てはまる	当てはまる	あまり 当てはまらない	まったく 当てはまらない
1 費用がかかる	1	2	3	4
2 忙しくて時間が取れない	1	2	3	4
3 校務を休んで出張できない	1	2	3	4
4 管理職が認めてくれない	1	2	3	4
5 他の教員への気がある	1	2	3	4
6 開催地が遠い	1	2	3	4
7 内容が実践的でない	1	2	3	4
8 その他 ()				

問7 大学で研修する機会があれば、どのような内容や方法の研修を期待しますか。

問8 現在、あなたが課題としていることはどのようなことですか。

アンケート調査の報告書は、全員の方へ2008年にお届けいたします。

①共同研究の報告書は2010年に発行される予定です。報告書送付を希望しますか。 (はい・いいえ)

②質問紙調査の後、2008年度にインタビュー調査を予定しています。神奈川県内の方を対象として、
1人1回1時間程度で行う予定です。インタビューに応じていただけますか。 (はい・いいえ)
はいと答えて下さった方には、対象者を確定した後、改めてご連絡いたします。

*①に「はい」と答えた方は、「氏名」「住所」を、②に「はい」と答えた方は、下記の全項目の記入をお願いします。

フリガナ

氏名

住所

〒 _____

電話 (自宅 or 携帯)

E-Mail (職場 or 自宅)

ご協力ありがとうございました。この調査で得られた情報を他の目的に使用することはありません。

いて、質問項目は、8つの大問から構成されている。

(1) 年齢層と性別

分析対象者の年齢層は、図 I-1「年齢層構成」、図 I-2「性別年齢層構成」にあるように、20代・30代の若者が約60%を占める。40代、50代はそれぞれ約20%の割合である。男女比は、約78%が男性で、女性の約3.8倍に当たる。男性、女性それぞれの年齢層を見ると、男性の回答者数185名で、年齢構成は20代から50代まで、20%前後から30%前後の構成になっている。女性の回答者数は48名で、年齢構成は、20代・30代をあわせて約73%、40代が約20%、50代は約6%であり、男性の年齢構成との相違が明確になっている。

図 I-1 年齢層構成

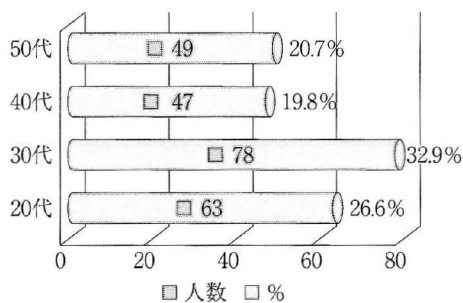
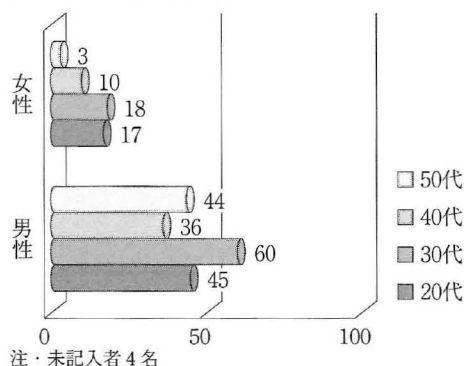


図 I-2 性別年齢層構成



(2) 現在の雇用形態

男女ともほぼ同じ傾向を示している。正規職員が約88%、臨時任用と非常勤講師をあわせ

て約12%。臨時任用と非常勤講師29名の年齢層は20代が約76%、30代が約20%という構成になっている。

(3) 現在の勤務校種

分析対象者の勤務校種を図 I-3「現在の勤務校種」で見ると、1番多い校種が中学校で約50%、2番目が小学校で約22%、3番目が高等学校で約19%となっている。本学で取得できる教員免許は中学校と高等学校の教員免許であり、小学校の教員養成課程はない。にもかかわらず回答者のうち、5人に1人が小学校教員である。

本学を卒業した後、通信教育等で小学校教員免許を取得したのち、小学校教員となった卒業生が多いのだろう。また、小・中学校の枠で採用されて、小学校教員として勤務しながら、夜間大学に通って小学校免許を取得した時代もあったという。卒業後、これらの方法で免許を取得し、小学校教員になっている。在学中の教職課程履修学生のなかにも、小学校教員免許の取得を希望する学生はいるが、回答者のなかでこれほどの割合を占めているということが、私たちにとって新たな発見となった。このデータは神奈川大学の卒業生が教職に就くための方法として、小学校教員免許取得の重要性を実績として示している。

図 I-3 現在の勤務校種

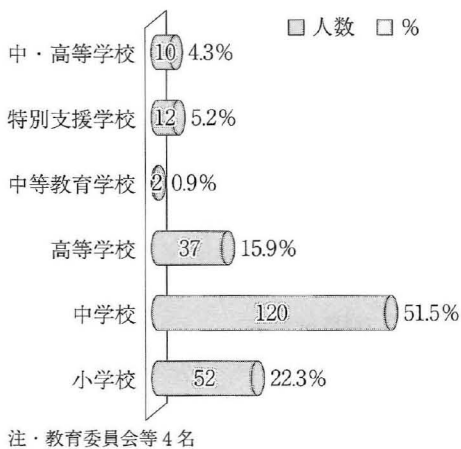


表 I-1 インタビューイの勤務校（学校種）

学校種	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	中学校・高等学校	計
人数	5	16	2	2	3	28

表 I-2 インタビューイの年齢層

	20代	30代	40代	50代	計
男	4	3	9	4	20
女	3	2	3	0	8
計	7	5	12	4	28

注・2008年8月時点の年齢を示す。

(4) 現勤務校での役職

校長・教頭・副校長の管理職は12名、主幹・統括教諭・主任・主事の間管理職者は53名、あわせて約27%が管理職の立場にある。

なお、質問紙調査の実施過程、分析過程については、鈴木そよ子・他「共同研究『教員のキャリア形成に果たす神奈川大学の役割』について」(神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学心理・教育研究論集』第27号, 2008.3, pp.111-121)に詳しく述べられている。

4. インタビュー調査の概要

本稿に続く報告ならびにインタビュー調査結果にもとづく論文の基本的情報として、インタビュー実施の概要と対象者について述べる。

(1) インタビューの目的

インタビューは、2007年度の質問紙調査を踏まえながら、大学に対する教員の期待や要望をより具体的に調査する目的で実施した。質問紙の回答の傾向を分析し、この傾向を仮説として、インタビューでより深く、より詳しく聞き取りを行なった。

(2) インタビュー対象者

インタビュー準備の第一歩として、質問紙調査を依頼した際に、回答者のうち神奈川県在住の卒業生には、2008年度実施予定のインタビ

ュー調査に協力してもらえるかどうかも答えてもらった。この時、インタビューに協力できるという回答のあった60名が、2008年度のインタビュー協力依頼の対象となった。インタビュー協力依頼の対象者のうち、インタビュー日程中に大学に来校できる28名がインタビュー対象者となった。

インタビューイの勤務校（学校種）については、表 I-1「インタビューイの勤務校（学校種）」、男女の内訳や年齢層については、表 I-2「インタビューイの年齢層」に示す。

(3) インタビュー実施期間・インタビュー方法

2008年8月4日（月）から8月22日（金）までの8日間で実施した。午前の部と午後の部に分け、個別インタビューと集団インタビューをセットにした。個別インタビューは1時間から1時間30分、集団インタビューは30分程度で、集団インタビューは、個別インタビューを実施したインタビュアーとインタビューイ全員が集まって行なった。

個別インタビューは1名のインタビューイを1名のインタビュアーが担当した。

(4) インタビューの質問項目

インタビューでは主に次の3点について質問した。

- ①インタビューイが見ている学校の現状、最近の変化

- ②「壁」体験（困難，危機の体験）の有無と
内容，乗り越えた経験
- ③研修経験と大学への期待

なお，インタビュー調査の実施過程，質問内容，分析方法等については，鈴木そよ子・他「教員のキャリア形成に果たす神奈川大学の役割—2008年度（第2年次）研究活動報告—」（神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号，2009.3，pp.81-93）に詳しく述べられている。